

【第7講】

一読で理解できる文章とするためには、伝えようとする内容に応じて適切な文体を選択することが重要です。

分かり難い文章には、多くの情報が詰め込まれているものです。従って、分かり易い文章を書こうと思ったら、不要な情報を落としておくことが重要です。しかし、必要な情報に絞り込んだとしても、読み手に正しく伝わるとは限りません。その理由は、読み手が文章を読んで理解するときには、文章に書かれた情報だけから文意を読み取るわけではないからです。では、他に何があるのかと言えば、「文体」（一般的な表現では「書きぶり」）です。話し言葉であれば、文字にしてしまうと同じでも、例えば怒った感じ、悲しそうな感じ、冗談を言っている感じなど、いろいろな違いを表現することができます。実は、文章でも同じようなことが起こっており、伝えようとする内容に応じて適切な文体を選択しなければ、読み手には正しく伝わらないのです。

光文社新書「わかったつもり」（西林克彦著）の中に次のような記載を見付けました。

「サリーがアイロンをかけたので、シャツはきれいだった。」

この文章は直ちに了解可能です。しかし、

「サリーがアイロンをかけたので、シャツはしわくちゃだった。」

という文章は、ちょっと考えなければ了解できません。それは、「サリーはアイロンをかけるのが下手なのではなかろうか」という仮定を持ち込んで始めて了解可能となるからです。

この部分は「人は文脈を前提として文章を理解する」ということを説明するために書かれていますので、その意味からは間違ったことが書かれているわけではありません。

しかし、

「アイロンをかけたのがサリーだったので、シャツはしわくちゃだった。」

と書かれていたらどうでしょうか。これなら、

「サリーがアイロンをかけたので、シャツはきれいだった。」

と同じように直ちに分かります。では、

「アイロンをかけたのがサリーだったので、シャツはきれいだった。」

はどうでしょうか。これも直ちに分かります。でも、

「サリーがアイロンをかけたので、シャツはきれいだった。」と、

「アイロンをかけたのがサリーだったので、シャツはきれいだった。」

とでは、少しニュアンスが違ってきます。「サリー」、「アイロンをかける」、「シャツがきれい（あるいはしわくちゃ）」という個々の情報は同じでも、それらの並べ方によって伝わる内容は違うのです。これが、私の言う『文体の選択』です。

つまり、

「サリーがアイロンをかけたので、シャツはしわくちゃだった。」

という文章は、読み手が仮定を持ち込まなければならないために分かり難かったのではなく、文体の選択を間違えていたために分かり難かったのです。何故なら、文体を正しく選択して、

「アイロンをかけたのがサリーだったので、シャツはしわくちゃだった。」

と書いていれば、読み手が仮定を持ち込む必要もなかったのですから。逆に言えば、文体の選択を間違えたために、読み手が仮定を持ち込まなければならなくなったということです。

では、文体の選択について、もう少し細かく見ていきましょう。

「サリーがアイロンをかけたので、シャツはきれいだった。」

という文章では、読み手の意識は「サリー」よりも「アイロン」に向かいます。その結果、読み手の頭の中には、「アイロンをかける」⇒「シャツがきれい」という構図が出来上がります。これは直ちに了解できる内容です。

次に、

「アイロンをかけたのがサリーだったので、シャツはきれいだった。」

という文章では、読み手の意識は「アイロン」よりも「サリー」に向かいます。その結果、読み手の頭の中には、「アイロンをかけた人がサリー」⇒「シャツがきれい」という構図が出来上がります。これも直ちに了解できる内容です。

ところが、

「サリーがアイロンをかけたので、シャツはしわくちゃだった。」

という文章では、読み手の意識は「アイロン」に向かい、その結果、読み手の頭の中には、「アイロンをかける」⇒「シャツがしわくちゃ」という構図が出来上がります。これは常識に反するので、そのままでは了解することができません。それで、少し頭を使って、

仮定を持ち出すことになったのです。

このように、文体の選択を間違えると読み難い文章になってしまうので、伝えようとする内容に合った文体を選択しなければなりません。そのためには、何となく文章を書くのではなく、伝えようとする内容をロジカルに分析する姿勢が大切です。

尚、蛇足ですが、「サリーがアイロンをかけたので、シャツはきれいだった。」という文章は、明細書の文章としては適切ではありません。「シャツはきれい」は、「シャツの柄がきれい」など、いろいろな意味に取れるので、明細書では「シャツはきれいにシワが伸びていた」といった明確な表現とすべきです。